側音化構音のある母と子の指導

―側音/ki・ke・kj・gi・ge・gj/の指導経過の比較―

山形市立第三小学校　梅村　正俊

はじめに

同じ構音に側音化構音が認められる子供と母親に対する指導を経験した。子供の指導終了の10回に、母親の指導の10回を対比させ、側音化構音の指導について、以下の２点から考えたい。

１，側音化構音の持つ問題点　　２，指導の時期

Ⅰ　対象児童　のぶお君*（仮名）*；２年；男子

Ⅱ　初回面接時の問題の概要

１．のぶお君について（初回面接；X年２月８日）

⑴　家族構成；父（35歳・公務員），母（36歳・教員），本人，弟（１歳）

⑵　初回面接時の主訴；

o　のぶお君；「うまく言えない言葉がある。」「キャ、キュ、キョ」「小っちゃな『ョ』がついていると難しい。」「キリンの『キ』が普通の『キ』でなくって。」、「直したい？」との指導者の問いには、はっきりと「うん。」と答える。

o　のぶお君の問題について母親；口唇裂の術後を見てもらっている病院の言語の先生から、「誤った発音がある。」と指摘を受け、「直したほうが良い。」と勧められた。自分も同じ発音の誤りがあるので直るものなら直してあげたい。１歳の弟も同じ発音になっても困るし……。

⑶　構音の様子；側音化構音／ki・ke・kj・gi・ge・gj
単音節・単語・短文・会話等で一貫した誤りを示す。

⑷　発達歴・既往歴等；３カ月…口唇裂の手術、２歳…修正手術、８歳…再修正手術

２．母親について（初回面接；X＋１年６月３日＝のぶお君の指導10回目時）

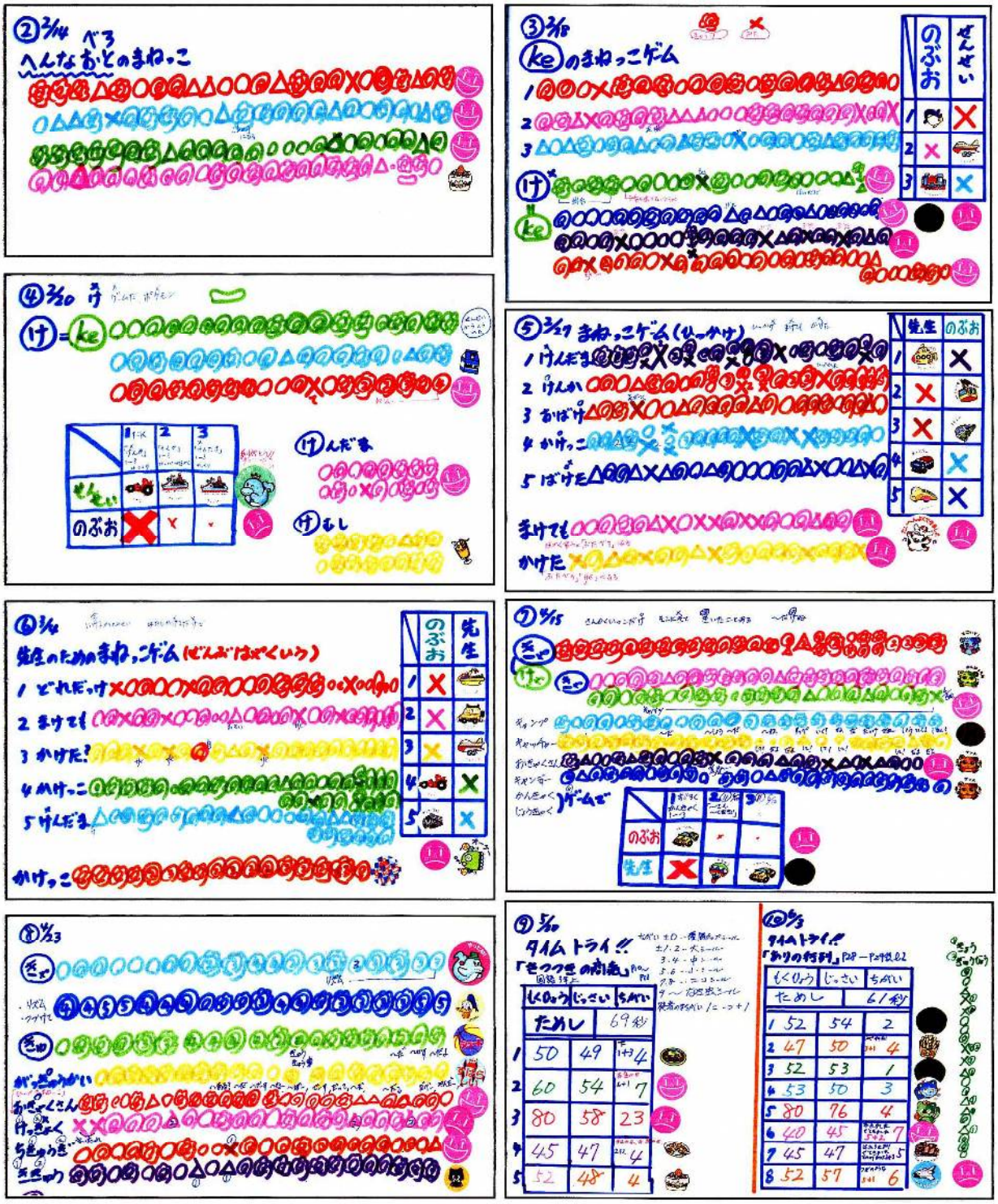
⑴　初回面接時の主訴【資料参照】；先生、大人のことばの教室ってないんでしょうか？　のぶおの発音も良くなってきたし、これからでも遅くないんだったら直したい。私のも直してもらえますか？　**悩みは、私のほうが子供より深いかも……。**

⑵　構音の様子；側音化構音／ki・ke・kj・gi・ge・gj
単音節・単語・短文・会話等で一貫した誤りを示す。

Ⅲ　指導の経過概略【初回＝１回目の指導＝前述】

１．のぶお君について【次ページの図は、指導時の子供に使用しているノートのコピーである】

回数	指導の内容及び評価・所見
② 2/14	o　『へんなおとのまねっこ』と称して、ペコちゃんの舌のまねや舌を右や左に動かしたりして、指導者の舌の動きを模倣するコツをつかませた。また、舌を出したまま変な音を出させたり、指導者の微妙な舌の動きを模倣させながら、徐々に［kw＋え］から［ke］を導いたところ、２列目の練習では普通の「け」が言えた。（ノートの２列目<水色>の評価の中央部分に小さい文字で『「ke」になる』とあるのは、初めて普通の「け」が言えたことを表している。）
③ 2/18 ④ 2/20	o　『ⓚⓔのまねっこゲーム』と称しているゲームで、［ke］を20回～25回模倣し、その中で３回下手（３個の×，△３個で×１個）の時は先生の勝ち」というルールで練習を進めた。 o　１回戦目で、「け」をイメージしたのか、側音の［ke］になる。いわゆる芋舌には「ぶたべろ」、普通の舌には「きゅうりべろ」と命名し、前者の場合×になることを教えた。 o　［ke］の表記では正しく言えることから、ゲーム後、［ケ］の練習に移行しようとⓚけと記入すると、のぶお君がその字を読む。しかし、側音の［ke］になる。そこで、『ⓚⓔ＝ⓚけ』と表記した。 o　４回目の通級時には、単語の語頭で普通の「け」が言えるようになった。
⑤ 2/20	o　５・６回目の指導では、一つ一つの単語について、『続けていえる』の段階から『ひっかけまねっこ』と称している『短文』の段階にかけての練習を行った。『ひっかけまねっこ』では、「けんだましたごどあんの？」や「運動会で、かけっこ何等なんだっけ？」など答えを要求しているような模倣



⑥ 3/4	での練習を行った。「けんか」の練習の際、１回だけひっかかてしまう。 o　さらに、例えば、「おばけ」については、「（大声で）おばけだー！」「おばけさばけたよ」「おばけさばげだっけがやー」「たけのこのおばけ出たー」のように、文を変形すると共に、断定的に言う、質問風に言う、大きな声で言う、笑いながら言うなど、言い方に表情をつけての練習も行った。 o　６回目の指導での誤り方は、［tʃe］になることが多かった。また、会話の中で、普通の「けｌが聞かれるようになってきた。
⑦ 4/15 ⑧ 4/23	o　７・８回目の指導では、／kj／の『音つくり』から『短文』までの指導を行った。 o　［け＋ゃ］から［kja］を導いたところ簡単に［kja］が言えた。また、［ki］の構音点指導は行わなかったが、「ききゅう」が言えるようになった。その後の練習は、５・６回目同様、『すごろく』『言い方に表情をつける』『ひっかけまねっこ』などで行った。
⑨ 5/20	o　／ki・ke・kj・gi・ge・gj／の全ての構音が、一般的な指導段階『短文』で言えるようにになってきたので、『自由会話への般化』を目的に、『タイムトライ』を行う。これは、『①国語の教科書からのぶお君の好きな文を選ぶ　②その文を好きな速さで読み要した時間を「ためしよみ」の時間とす

⑩ 6/3	③自分でどのくらいの時間で読むかを決める　④実際に読んでみて自分で決めた時間にどのくらい近いかで、ニコニコシール、キャラクターシール、優勝カップシールなどが貰える　⑤また、１つ誤るごとに１秒をたす』というルールで練習を進めた。 o　９回目の指導での３回目のトライでは、「80秒で読む」としたものの23秒の差が出てしまった。そこで次は「45秒で読む」と自分で設定する。その差は２秒と「大シール」のはずだったが、２つの誤りがあったために「中シール」になる。10回目の指導では、構音の評価を厳しくし、「それらしく聞こえる発音」は全て×としたが、８トライでの合計の誤りは７つだった。 o　何気ない会話でも、充分に普通の構音になったので指導を終了する。

２．母親について【初回＝１回目の指導＝前述，１回の指導時間は、10~30分程度】

回数	指導の内容及び評価・所見　（◎；母親の内省）
② 6/10 ③ 7/8	o　２回目の指導で、［kɯ＋e］から［ke］を導こうとしたが、早く「け」を言いたいという気持ちの表れか、はっきり「く、え」と提示すると躊躇いなく「く、え」が言えるが、少しでも「け」の印象を感じると、芋舌になってしまった。 o　そこで、３回目の指導では、紙に「kɯeんか」「kɯeんだま」と書き、前回のイメージの持たせ方とは逆に、「喧嘩」や「ケン玉」のイメージを持たせ、構音としては［kɯ＋e］を言うようにさせた。
④ 9/2	o　［ke］が、１秒間隔で５回続けて言うこともできた。そこで［けゃ］と記入し［keja］から［kja］を導き、さらに［けゃんぷ］と記入し［kejaNpɯ］から［キュンプ］を導いた。
⑤ 9/30 ⑥ 10/7	o　５回目の指導での「ケンカ」「ケンダマ」「カケッコ」の練習で、３～５回続けて言えるようになる。また、語尾語中に位置する「オバケ」「ポケット」「トケー」も言えるようになる。 o　６回目の指導では、「ケン玉ダー」「かけっこしよう」などのように２語文でも言えるようになる。 ◎　「家で練習してたら、それを聞きつけた子供から、ふーん、ママはまだそういう練習してんのかと馬鹿にされてしまった。」と嬉しそうに話す。
⑦ 10/21 ⑧ 10/28 ⑨ 11/21	◎　「子供からのプレッシャーか［け］を言おうとすると、どうしても変になる。教えてもらったように舌を平らにしてからケを言おうとした瞬間に丸まってしまい、思ったように言えない。一人ではなかなか上手く練習できないものですね。」としみじみと話す。家での練習を一時中断する。 o　再度、［kɯ＋e］から［ke］を導く。すぐ［ke］が言え、［ケンカ］の言い方に表情をつけての練習ができるようになった。 o　しかし、８回目・９回目の指導でも［ke］の音作り（構音点指導）から始めなければならなかった。 o　両回とも、「ケン」「ケンカ」「ケンダマ」について練習を行う。 o　９回目の指導では［ke＋や＝kja］［ke＋ゆ＝kjɯ］［ke＋よ＝kjo］の練習ができるようになったが、「きゃ」などのイメージが強くなると微妙に舌が芋舌っぽく動き出していた。この状態をビデオに撮って見せる。「なかなか癖って抜けないものですね」と母親。「30年以上お母さんと共にいたわけだから、そう簡単に芋舌のほうだって別れ難いんでない。」と指導者。家での練習を再開する。
⑩ 12/12	◎　「吐き気がして、気分が悪いんだけど来た。」と言って来室する。 o　［ke］を２～４回続けて言う練習を行う。途中気分が悪くなり10分程度で練習を終了する。

Ⅳ　考　察

１．側音化構音の持つ問題点

のぶお君の母親は、子供の相談の時、自分の発音の誤りについて話はしていたものの、直して欲しいとの意思表示はしていなかった。しかし、一時はあきらめていたものの子供の指導が進み改善していくのを目の当りにし、自分も『治るものなら治したい』との欲求が強く沸いてきたのだろう。それが、**『悩みは、私のほうが子供より深いかも…。』**の言葉となって吐露されたものと考えている。

側音化構音障害の場合、指導が難しい、また、誤り音の数や種類によってはそれほど目立たないなどの**根拠のない理由**から、指導が敬遠されがちである。

のぶお君の母親や山形県言研編『ことばの教室の指導と運営』に見られる事例のように、言葉がコミュニケーションの重要な一手段であることから、言葉の一部であるにせよ、また、他者から見てそれほど目立たない場合であっても、その言葉に何らかの問題が潜んでいるということは、本人自身にとっては重大な問題であることを物語っているとは言えないだろうか？

のぶお君の母親の誤り音は、／ki・ke・kj・gi・ge・gj／のみが側音化構音になっていただけで、聴覚的印象としては「奇麗な着物」と誰しもが聞き取れる発音だったのである。

側音化構音障害も目立たない吃音同様、『問題の内面化』のしやすい問題なのである。

2．指導の時期

側音化構音障害の指導時期として、「正音との聴覚的弁別が難しい。低年齢児では誤り音の自覚が乏しい。従って、3年生や4年生になってからの方が指導がしやすい」との指摘が以前からある。

ならば、のぶお君の母親の方が、「正音との聴覚的印象が近くても確実に聴覚的弁別ができる。そしてこれまでの経過から（資料参照）誤り音の自覚をしっかり持ち、治す意欲も充分すぎるほどある」ので、当然のぶお君よりも早期に正しい構音を獲得しても良いはずではないのだろうか？　しかしながら、実際には、10回の指導では終了しなかったのである。これは、母親が「なかなか癖って抜けないものですね」と述べるように、30数年に渡って側音化構音になっていた習慣性の強さのゆえに、本人の努力とは裏腹に『わかっていてもできない』状況にまでなっていたものと言える。

元来［ki］や［tʃi］の構音は3歳半までには獲得する構音なわけだから、3歳半の能力があれば指導は可能と言える。従って、低年齢児であってもそう指導が難しいわけではない[3)4)5)]。側音化構音の持つ問題の観点からは、早期の指導が望まれるのである。

まとめ

側音化構音の持つ問題点は、側音化構音障害も目立たない吃音同様、『問題の内面化』のしやすいことである。従って、一見問題がなさそうに見える場合であっても、安易に「子供は気にしていないだろうと」判断せずに、子供の将来を視点に指導の必要性を判断しなければならない。

側音化構音への指導の時期は、年中児の時期には可能であり、早期の指導が望まれる。

参考文献

1）梅村正俊・長澤泰子 1985 就学児童の構音検査に対する側音化構音の実態―側音化構音の自然治癒について― 日特教第23回大会論文集
2）長澤泰子・梅村正俊 1989 側音化構音のprevalenceに関する研究　国立特殊教育総合研究所研究紀要第17巻
3）梅村正俊 1997 構音指導に対する『構音の改善』に関わるいくつかの要因について ―指導事例を通して― 県言研研究集録第21集
4）梅村正俊 1999 機能的構音障害としての「側音化構音」になる子の指導―その1―「側音化構音」の理解と子供の指導のあり方 県言研研究集録第23集
5）梅村正俊 2000 低年齢児の『誤り構音』への指導―側音化構音への指導は難しいわけじゃない 県言研研究集録第24集
6）山形県言語障害児教育研究会編 2002 ことばの教室の指導と運営 山形県言語障害児教育研究会 p90-92

――《資料》――

私は人と話をするのが好きです。が、人と話をすることにコンプレックスを感じています。それは、私の発音が他の人と違うことに気づいたからです。

自分の発音が他の人と違うことに気づいたのは、大学生の時です。それまでは、「ちょっと言いにくい言葉があるな。」とか「口がまわらないなあ。」と思う位で、他の人から指摘されたり、笑われたりすることもなく、「気のせいだ」と思い込んでいました。

ところが、大学生時代のある日のこと、突然「大熊(旧姓)さん“き”って言ってごらん。」と言われたのです。自分でも言い難いと感じていた発音でしたが、「あなたの“き”なんか変だよね。」と言われ驚きました。さらに続けて、私の真似をしてその人が言った“き”の発音は、私が聞いても変だと感じましたし、『自分の発音は他の人と違う』と自覚をした最初です。それからと言うもの、“キリン”や“ペンギン”がうまく言えないということで、時々ふざけては「キリンって言ってみな」、「ペンギンって言ってごらん」などとからかわれるようになりました。そんな時私は、みんなの前では笑っていても、心の中では深く傷ついていました。「どうして言えないのだろう？」とアパートで一人、鏡に向かって発音の練習をしてみました。なかなか上手に言えるわけもなく『嫌な発音だ』と諦め、大学生活を送るようになりました。

大学卒業後、教員として働くようになると、ますます自分の発音が気になるようになってきました。生徒の前で教科書を読んだり、マイクを通して全校生の前で話をしたりすると、笑われたりすることはありませんでしたが、とても緊張し苦痛の連続でした。

結婚すると、さらに嫌なことが増えました。それは、自分の名字にある“ひ”がうまく発音できず、よく聞き返されるのです。特に電話がだめです。何回も言い直し、最後には「は、ひ、ふ、へ、ほ、の**ひ**です」と言うことになります。

最近、ある病院の先生から、長男の発音について指摘を受けました。実は長男も私と同じような発音で「ちょっと変かな？」とは思っていたのですが、私もそうであるように“**上手に付き合って行かなければならないこと**”なのだと思っていました。さらに“ことばの教室”への通級を勧められました。私の発音を聞いて育った長男のことですから、私は母親としての責任を感じ、悲しい気持ちになりました。反面、早く気づき、治すチャンスなのだ思うと少し楽な気持ちになりました。

私も小学生の頃、“ことばの教室”への通級を勧められたのだそうです。しかし、私の両親は通わせることはありませんでした。“ことばの教室”に対するイメージなど様々な理由があったのでしょうが結果として大人となった今でも嫌な思いをし、苦労しています。「小学生の時にしっかり練習していれば…」と思うと残念でなりません。

長男の通級の際、「指導が必要」と言う病院と「必要なし」と言う小学校の間で苦労しました。関係機関の認識の違いを感じました。当然素人の私たちの“言葉や発音、ことばの教室”に対するイメージなど、いかにいいかげんなものであるか想像がつきます。

長男は“ことばの教室”へ通ってきれいな発音に変わるでしょう。最近、二男がたくさんおしゃべりをするようになりました。「二男の発音は大丈夫だろうか？」とても心配しています。

私は今からでも“大人のことばの教室”があるのなら通って発音を治したい。そして、どんな言葉も気にせず、思い切り話をしてみたいと思っています。

側音化構音の指導の必要性とその適時性に関する考察

―同じ側音化構音が認められる母親と子供の構音指導から―

梅村　正俊
（山形市立第三小学校）

Keywords：側音化構音，指導の必要性，指導の適時性

はじめに

同じ構音に側音化構音が認められる子供と母親に対する指導を経験した。子供の指導終了回数の10回に、母親の指導の10回を対比させ指導の経過を概観し、側音化構音の指導の必要性とその適時性について考察する。

Ⅰ　初回面接時の問題の概要

1．対象児（2年；男子）について

(1)　家族構成；父(35歳)，母(36歳・教員)，本人，弟(1歳)

(2)　本児の初回面接時の主訴

「キャ、キュなどうまく言えない言葉がある。」「キリンの『キ』も普通の『キ』でなくって…」と本児。「直したい？」との問いには、はっきりと「うん。」と答える。

(3)　構音の様子；側音化構音／ki・ke・kj・gi・ge・gj

単語・短文・会話での誤りの一貫性；＋

(4)　発達歴・既往歴等；3カ月…口唇裂の手術

2．母親について

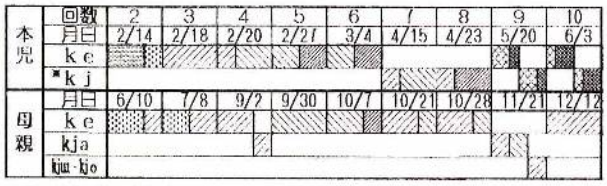
(1)　初回面接時の主訴【資料参照】

「先生、大人のことばの教室ってないんでしょうか？　子供の発音も良くなってきたし、これからでも遅くないんだったら直したい。私のも直してもらえますか？　悩みは、私のほうが子供より深いかも……。」

(2)　構音の様子；子供と同様

Ⅱ　子供と母親の指導の経過の概略【初回＝1回目の指導】

図1は、子供と母親の指導の経過の概略をまとめたものである。



1 変な舌・変な音のまねっこ　2 単音　3 単音節　4 単語
5 句や短文　6 長文（教科書等）　/ 会話　*kj；ki. kja kjw. kjo

図1；子供と母親の構音指導の経過概略

子供の指導では、5回目には「おばけさばげったっけの？」や「かけっこでまげだっけ」など方言での言い方でも正しい構音で[ke]が言えるようになり、会話でも正しい構音での[ke]が聞かれるようになった。さらに、7回目から指導を始めた[ki，kj]も、8回目には「おきゃくさんきたっけ」などでも言えるようになった。9回目には、取り上げて指導していなかった[gi，gj]も会話で舌の盛り上がりのない正しい構音になっていたので10回目の指導で終了とした。尚、家庭での練習は全く行わなかった。

母親の指導では、2回目に[kw＋e]から[ke]を導こうとしたが、早く「け」を言いたいという気持ちの表れか、少しでも「け」の印象を感じ取ると舌が盛り上がってくることが多かった。4回目から家での練習を始める。7回目に、「教えてもらったように舌を平らにしてから「け」を言おうとした瞬間に丸まってしまい思ったように言えない。癖ってなかなか抜けないもんですね。」としみじみと話す。家での練習を一時中断することにした。10回目に、「吐き気がして、気分が悪いんだけど来た。」と言って来室したが、途中気分が悪くなり10分程度で練習を終了する。

Ⅲ　考　察

1．側音化構音の指導の必要性

側音化構音障害の場合、指導が難しい、また、誤り音の数や種類によってはそれほど目立たないなどの理由から、指導が敬遠されがちである。母親の誤り音も／ki・ke・kj・gi・ge・gj／のみが側音化構音になっていただけで、聴覚的印象としては「奇麗な菊」と誰しもが聞き取れる発音だった。しかし、他者から見てそれほど目立たない場合であっても、その言葉に何らかの問題が潜んでいるということは、本人自身にとって重大な問題になり得ることをこの母親の例は示している。つまり、自然改善しにくい側音化構音[1]の場合、誤りが『目立つか、目立たないか』は指導の必要性の判断基準にはなり得ないのである。

2．指導の適時性

側音化構音の指導時期として、「正音との聴覚的弁別が難しい。低年齢児では誤り音の自覚が乏しい。従って、3年生や4年生になってからの方が指導がしやすい」との指摘が以前からある。

ならば、母親の方が、聴覚的弁別が確実にでき、誤りの自覚をしっかり持ち、治す意欲も充分過ぎるほどあるので当然子供よりも早期に正しい構音を獲得しても良いはずではないのだろうか。

子供よりも改善経過が遅いのは、母親が「なかなか癖って抜けないものですね」と述べているように、30数年に渡って側音化構音になっていた習慣性の強さのゆえに、本人の努力とは裏腹に『わかっていてもできない』状況にまでなっていたものと言える。

元来[ki]や[tʃi]の構音は3歳半までには獲得する構音であるので、3歳半の能力があれば指導は可能と言える。従って、低年齢児であってもそう指導が難しいわけではない[2)3)]。側音化構音の持つ問題の観点からは、早期の指導が望まれる。

まとめ

側音化構音の持つ問題の一つは、『問題が内面化しやすいこと』にある。従って、一見問題がなさそうに見える場合であっても、子供の将来を視点に指導の必要性を判断しなければならない。

参考文献

1) 長澤泰子・梅村正俊　1989　側音化構音のprevalenceに関する研究　国立特殊教育総合研究所紀要第17巻
2) 梅村正俊　1991　構音指導における『構音の改善』に関わるいくつかの要因について　県言研研究集録第21集
3) 梅村正俊　2000　低年齢児の『誤り構音』への指導－側音化構音の指導は難しいわけじゃない　県言研研究集録第24集

（UMEMURA Masatoshi）

資料；母親の手記からの抜粋

私は人と話をするのが好きです。が、人と話をすることにコンプレックスを感じています。それは、私の発音が他の人と違うことに気づいたからです。自分の発音が他の人と違うことに気づいたのは、大学生の時です。―**中略**―ある日のこと、突然「大熊（旧姓；仮名）さん“き”って言ってごらん。」と言われたのです。自分でも言い難いと感じていた発音でしたが、「あなたの“き”なんか変だよね。」と言われ驚きました。さらに続けて、私の真似をしてその人が言った“き”の発音は、私が聞いても変だと感じましたし、『自分の発音は他の人と違う』と自覚をした最初です。それからというもの、“キリン”や“ペンギン”がうまく言えないということで、時々ふざけては「キリンって言ってみな」、「ペンギンって言ってごらん」などとからかわれるようになりました。そんな時私は、みんなの前では笑っていても、心の中では深く傷ついていました。「どうして言えないのだろう？」とアパートで一人、鏡に向かって発音の練習をしてみました。なかなか上手に言えるわけもなく『嫌な発音だ』と諦め大学生活を送るようになりました。―**中略**―

大学卒業後、教員として働くようになると、ますます自分の発音が気になるようになってきました。生徒の前で教科書を読んだり、マイクを通して全校生の前で話をしたりすると、笑われたりすることはありませんでしたが、とても緊張し苦痛の連続でした。

最近、ある病院の先生から、長男の発音について指摘を受けました。実は長男も私と同じような発音で「ちょっと変かな？」とは思っていたのです。―**中略**―さらに“ことばの教室”への通級を勧められました。私の発音を聞いて育った長男のことですから、私は母親としての責任を感じ、悲しい気持ちになりました。反面、早く気づき、治すチャンスなのだ思うと少し楽な気持ちになりました。

私も小学生の頃、“ことばの教室”への通級を勧められたのだそうです。しかし、私の両親は通わせることはありませんでした。―**中略**―　様々な理由があったのでしょうが結果として大人となった今でも嫌な思いをし、苦労しています。―**中略**―長男の通級の際、「指導が必要」と言う病院と「必要なし」と言う小学校の間で苦労しました。関係機関の認識の違いを感じました。―**中略**―長男は“ことばの教室”へ通ってきれいな発音に変わるでしょう。最近、二男がたくさんおしゃべりをするようになりました。「二男の発音は大丈夫だろうか？」とても心配しています。私は今からでも“大人のことばの教室”があるのなら通って発音を治したい。そして、どんな言葉も気にせず、思い切り話をしてみたいと思っています。

『側音化構音障害に潜む種々の問題』

○「俺はもう職業に付いているから、もういいです。」と断った坂口さん（仮名）

坂口さん（仮名）は、５０歳近くになるタクシードライバーのお父さんです。お子さんが、側音化構音のために指導を受けに通級するのに毎回付き添ってくるのです。

実は、坂口さん自身、側音化構音があるのです。そして、ずいぶん前から気がついていました。ご自身の息子さんの側音化構音に、家族の誰よりも早く気がついたことは言うまでもありません。

ある日、お子さんの指導担当の先生が、冗談交じりに、でも半分は本当に「お父さんも、一緒に指導しましょうか？」と投げかけると、「俺はもう職業に付いているから、もういいです。」と即座に笑顔で断りました。「本当にいいんですか？」とさらに一言。すると、坂口さんは、「実は、若い頃はずいぶん悩んだこともあった。でも、直そうとしても直らないものはしょうがない。俺、頭が悪いから人の前で話をするなんていう職業に付けるはずもないし……。自分が小学生の頃はことばの教室もなかったし……。で、あきらめた。だから、自分の息子が俺と同じ発音になったんで、驚くやら……。で、せめて、息子だけでもちゃんとした発音にしてやりたい。俺と同じことで悩ませるわけにはいかないものな……。」と自嘲気味に話すのでした。その話をする坂口さんの雰囲気からは、本当はやりたい仕事があったのではと感じ取ることができました。

●人生の岐路に立たされた女子学生、真紀子さん（仮名）

真紀子さん（仮名）は、ある大学の大学院の２４歳の女子学生です。

標本になるような側音化構音障害でした。［キ・キャ行］［ギ・ギャ行］［シ・シャ行］［チ・チャ行］［ジ・ジャ行］［ヒ・ヒャ行］［リ・リャ行］の全てが側音化構音になっているのです。しかも、聴覚的には、［チ・チャ行］［ジ・ジャ行］の音は、［キ・キャ行］［ギ・ギャ行］に近く聞こえました。ですから「地球・地中・気球」の発音は、どれも同じに聞こえ区別することはできません。

教員の採用試験に無事合格し、卒業を待つばかりでした。

ある日、指導教官から次のことを言われ悩みの日々が続くことになりました。

「あなた、教師になるつもりなら、自分の発音をなんとかしなさい。できないのなら教師になるのは、諦めなさい。子どもが、あなたの話を聞き取れないことがあるよ。それじゃ教育できないでしょう。」と言われたのです。

真紀子さんの話では、母親は、真紀子さんが小学校に入学する前から気がついており、担任に相談したが、「そのうちに直るだろう。２年生３年生になって発音が変な子はいないので。」と言うことなのでほおっていたとのこと。そして、３年生になっても直らないので、母親なりに考え、練習を試みたが直らなかったので、諦めていたというのです。

真紀子さん自身、他の人と言葉が違うことや話が通じないことがあると気がついたのは、母親が一生懸命直し始めた３年生頃からということでした。

真紀子さんに、出身の県どころか市にも１年生の頃にはことばの教室があったことを教えると、「どうして担任はことばの教室のことを教えてくれなかったのだろう？　そのとき行っていれば、今、こんなに悩まなくってもいいのに！」との言葉が、本当に悔しそうにポツリとこぼれました。

□うまく言えない発音で口をつぐむ大橋君（仮名）

大橋君（仮名）は、小学４年生の男の子です。

掃除が終わって反省会の時、「奇麗に掃きました。」「奇麗に拭きました。」と言うことになっています。

大橋君の掃除場所の担当になってまもなく、掃除終了後の班での反省の時です。反省の言葉が大橋君の番になりました。「～～できれいに掃きました。」「～～できれいに拭きました。」を言う時、［キ］の発音で、一瞬手を口元に当てるのです。そして、全体的には、ぼそぼそと小さい声で言うのでした。その言葉を聞いて［キ］の音が歪んでいることに気が付きました。明らかに側音化構音です。

学級担任は、口数が少ないし、ぼそぼそとした話し方でよく聞き取れないし、行動面でも静かな方なのでこれで良いのだろうかとは考えていたと話をしていました。

消極的な行動やはっきりしない話し方の直接的な原因が、うまくできない発音があることを気にしている結果かどうかは分かりません。しかし、現在気にしていることだけは確かです。その後、指導を受けるようになりました。発音のことを聞いてみました。気がついたのは３年生の頃ということでした。